

# 「お～になる」と「れる・られる」

坂 本 恵

## 1. はじめに

「お～になれる」<sup>(1)</sup>と「れる・られる」は、いずれもいわゆる尊敬語の客観的付加形式として、よく使われる形式である。「これからの敬語」にも尊敬語の形式としてこの二つがあげられており、<sup>(2)</sup>また、他の敬語の分類を見てもこの二者は形式動詞と助動詞という文法上、形態上の違いはある<sup>(3)</sup>が、どちらも尊敬語の形式としてあげられており、同じように扱われることが多いといえる。「お～になる」に関しては、入らない動詞のあることの指摘があるが、「れる・られる」との違いはこれだけだろうか。「れる・られる」は「これからの敬語」に「すべての動詞に規則的につき、かつ簡単であるのでむしろ将来性があると認められる」とあるが、「れる・られる」は将来「お～になる」に代わる可能性があるのだろうか。今回はこの二つの形式の違いを調査、考察することにした。

「お～になる」についてはその成立に関していくつかの研究がある。<sup>(4)</sup>「れる・られる」については歴史の長い語であり研究も多い<sup>(5)</sup>が、ここでは現代の用法に限って考えることにする。

今回の調査では、基本的に筆者の母語話者としての内省を元に、使うかどうかの判断を下した。実際に使われた例について調べることはできるが、使われなかった例については用例から考えることはできないからである。調査はこの二つの形式の違いを見るために、どのような動詞について使われるか、また、どのような文型について使われるかという二つの観点から行った。

## 2. 尊敬語形式と動詞

まず、「お～になる」と「れる・られる」という尊敬語形式に、どのような動詞が入り得るかを考えるが、ここでは「日本語基本動詞用法辞典」<sup>(6)</sup>にある700余の動詞を調査した。それぞれの形式について個別に検討したが、次の基準により5つに分類する。全く問題なく使われるもの(A)、若干問題があるが使われる可能性の強いもの(B)、使わないとはいえない

いかなり問題があるもの(C), 形式上使われないもの(D), 敬語形式を全くとらないもの(E)である。

まず、敬語形式を全くとらない動詞(E)だが、それは、人の動作として使われないもので、たとえば「合う」「売れる」「枯れる」「建つ」「臭う」「割れる」などである。また、よく言われるように俗語、悪い感じ、下品な感じを与えるものも尊敬語形を取り得ない。(33語、全体728語の4.5パーセント—以下同じ)

形式上使われないもの(D)というのは、「お～になる」では、たとえば「着る」「寝る」「死ぬ」「知る」「行く」「言う」など語幹が一音節のもので、別の尊敬語形式を持っているものなどである。

使われないことはないが、かなり問題がある動詞(C)というのは、「お～になる」では例えば「書ける」などの可能動詞である。「お書けになる」というような形が考えられないことはないが、かなり問題がある。また、「繰り返す」「間に合う」など音節数の長い語形や複合動詞は「お～になる」をとりにくいこともよくいわれている。これらがCである。

「お～になる」ではこのC Dの区別が明確であるが、「れる・られる」では必ずしも明確ではない。そこで「れる・られる」では一括してC Dとする。

問題があるが使われるもの(B)は、形式上は何等問題はないが、あまり聞かない形、他の言い方が使われるであろうというようなものである。具体的には以下に示す。

## 2.1 「お～になる」と動詞

「お～になる」には形式上使われない動詞(D)がある(130語—17.9パーセント)。代表的なものは先にあげた、語幹が1音節である動詞であるが、これは別の尊敬語形式を持つもので、「お～になる」の形式はとらない。

漢語に「する」のついたサ変動詞は普通「お～になる」の形式では「ご～になる」になると言われるが、実際に多くのサ変動詞を考えてみると「ご～になる」の形になるものはそれほど多くないようである。ここで調査したものの中では「出発、使用、説明、卒業、到着、発表、発明、利用」などである。これ以外は、「勉強する」「返事する」「結婚する」など、「お、ご～なさる」の形がよく使われる。一部を除いたサ変動詞は別形式を持つものとして「D」に分類した。

次に問題の多いと考えられる動詞(C)は以下のようである。(103語—14.2パーセント)。まず、敬語動詞、可能動詞があげられる。また、語数の長い動詞、「乗り換える」「～始める」「～出す」などの複合動詞もこの分類にはいる。

「追う」「終わる」など「お」で始まる動詞、また、「お願い」、「お祝い」など「お」のついた形の名詞がよく使われるものであるような場合、「お＋名詞」＋「になる」のように理解され、「お～になる」の形式と意識されにくくなるためか、使われにくいようだ。「お」を語頭につけて敬語形を作る形式は、「お～になる」以外にも「お～する」、「お～いただく」、「お～下さる」などいくつかあるが、同様のことが考えられる。名詞の場合、「お」がつきやすい語とつきにくい語があるように報告されている<sup>(7)</sup>が、動詞の場合も名詞の場合同様、「お」のつく語、つかない語を整理した方がよいだろう。

次に、使われないことはないが、違和感のあるもの、他の形式で使われることが多いと考えられる動詞(B)はいくつかに分けられる。(97語—13.3パーセント)。

まず、「優れる」、「似る」、「住む」のように「ている」の形で用いられることが多いものは、「お似になる」「お住みになる」という形をとりにくい。「優れていらっしゃる」「住んでいらっしゃる」か、「お住みになっていらっしゃる」であろう。「似る」に関しては、「お似になる」が不安定な形として使用例が報告されているが、<sup>(8)</sup>語幹が一音節であることもあり、別の尊敬語形式は持たないものの、かなり問題があるといえる。また、人間の動作として表すときには、「履く」「飼う」「浮く」なども「ている」の形で表す方が多い。この場合「お～になる」を使うとしても「お～になっていらっしゃる」になるだろう。実際には、「～ていらっしゃる」の形が自然で、多く使われる形であると思われる。

その他、「乾かす」「組む」「転がす」「ねじる」「はやす」「見つける」「走る」など「お～になる」の形式を全くとらないというわけではないが、多少違和感を感じ、「～ていらっしゃる」の形をとる方が自然な感じを与えるものがある。これは「お～になる」が状態を表すものであるため、動作性の強いこれらの動詞は入りにくく、動作主の状態という形で「お～になっていらっしゃる」、或いは、「～ていらっしゃる」の方が好まれるということであろうか。「動かす」「書かす」「読ます」などの使役動詞も動作主の状態を表すものとはいえないため、「お～になる」の形より「～ていらっしゃる」の形が多く使われる。<sup>(9)</sup>「12月29日の夜行列車にご乗車になり、翌日にまたがる場合は、その列車から下車されるまで割引が適応されます」という例を見かけたが、<sup>(10)</sup>「乗車」は「乗る」動作と、「乗っている」状態を表すため「ご～になる」が使いやすいが、「下車」は「ごげしゃ」という音の問題もあるが、「下車」が動作に限られるため使いにくく考えられる。

次に、「飽きる」、「あきれる」、「憎む」、「悲しむ」、「あきらめる」、「感じる」などの感情を表す表現は、日本語の場合もともと自分以外のことについて言うことが少ないものであるため、他者のことを述べる場合に使われにくいことは理解しやすい。疑問の形にすれ

ば、相手のこととして表すことは可能ではあるが、そのようなことを相手に問いかけること事態が立ち入ったことであり、そのような言い方自体が敬語を使う考え方にそぐわないということになる。しかし、「お喜びになる」「お苦しみになる」などという表現は可能であるし、第3者についての描写でなら使われる。相手に問いかける、或いは相手のことを描写するという形では使われないが、第3者のことを描写するような場合には、「～ていらっしゃる」の形では使われそうである。また、ここにあげた例はどちらかと言うと、マイナスのイメージを持った感情であることも一つの原因であろう。先ほどの例と併せて考えると、「お～になる」で待遇するような上位者の、「飽きる」、「あきらめる」などの動作はあえて表現しないという暗黙の了解があるとも考えられる。

また、「消える」「折れる」「燃える」など、人を主体として言う動詞であっても、比喩的な言い方にはこの「お～になる」は使いにくい。

「お～になる」を使うことに若干問題がある動詞(B)としては、以上にあげたようなものがある。特に敬語に関しては、理論的には使うことができて、一度も聞いたことのない形は使いにくい。誤用であってもよく聞くものは正しいように感じてしまうのと同様である。また、「お～になる」のような高い敬意を表す形式では、そのような人の動作を表すのにふさわしくない動詞は避けられ、他の動詞を使うとか、その表現そのものを避けると言った回避が働くものと思われる。「お～になる」に関しては、使うことに問題がないと考えられる動詞(A)は全動詞の半分ほどである。

### 2.2.1 「れる・られる」と動詞

「れる・られる」は「お～になる」形式と比べると、制限が少ない。「どの動詞にもつく」といわれる所以であろう。しかし、「どの動詞にもつく」とまでは言えないようである。敬語形式をとらない動詞(E)を除けば、「お～になる」で問題となった動詞のほとんどにつけることが可能であるが、B、C D分類の動詞も存在する。

ほとんど使われない動詞(C D)としては、「ある」「いる(必要)」、「できる」「書ける」などの可能を表す動詞などがあげられる。(43語—5.9パーセント)。

可能だが、実際には使いにくい動詞(B)もいくつかあげられる。(103語—14.1パーセント)比喩的な言い方は「れる・られる」もつきにくい。(「あの方はこの問題について折れました」、「その場から消えられました」などはあまり使いそうにない。しかし比喩形な言い方が尊敬語形一般をとらないのではなく、「～て下さる」など恩恵を表す敬語を使って尊敬表現にすることは可能である。) また、よく指摘されるように、受け身と紛らわしい

ものには使われにくい。たとえば、「知らせる」「信じる」「捕まる」「逃げる」「ほめる」「驚かす」などである。実際に使われた例もないわけではないが、やはり紛らわしいことは事実である。また、「行く」「来る」「言う」は「れる」をつけることには問題はないが、それ以外の「寝る」「着る」などの、語幹が一音節の動詞は「られる」をつけると可能と紛らわしい。「お休みになる」「お召しになる」或いは「着ていらっしゃる」などの他の形が使われることが多いといえる。

敬語の専用語形に関しては、どれも程度の差はあるものの、つけることは可能である。その中で、「下さる」「いただく」「あげる」などの関係敬語は「れる」をつけることになり問題がある。(B)「申す」「参る」「おる」に「れる」をつけた形は丁寧語の中ではよく使われるものであり、問題がないとも考えられる(AまたはB)が、「致される」は余り使われず(B)、「存ずる」に至っては未然形が確定できないという形の問題もあり、つけられない形といってもよい(CD)。「いらっしゃる」「おっしゃる」などの尊敬語の専用語形はよくつけられる(A)。

### 2.3 「お～になる」「れる・られる」と動詞

(表1)

お～になる			れる・られる
別形式をもつもの			
語幹が1音節	行く言う	A	A
	その他	別形式	B
サ変動詞		ご～になる／別形式	A
敬語動詞		D	A／B／CD
可能動詞		B	D
「お」のつきにくい動詞		C	A
語数の長い動詞、複合動詞		C	A
「ている」の形が一般的な動詞		B	A
動作性の強い動詞、感情を表す動詞の一部		B	A
比喩的な言い方		C	B
「ある・できる・いる」		A	CD
受け身と紛らわしい		A	B

以上を表にすると次のようになる。(表1)

敬語動詞、比喩的な言い方を除けば、互いに補完的關係にあることがわかる。ここにあげた以外はどちらの形式も使えるものである。両者のA B C D Eの数は以下の通りである。

( ) 内はパーセント、小数点以下2桁を四捨五入。

(表2)

	A	B	C	D	E	計
お～になる	365(50.1)	97(13.3)	103(14.2)	130(17.9)	33(4.5)	728(100)
れる・られる	549(75.4)	103(14.1)	43(5.9)			728(100)

### 3. 尊敬語形式と文型

尊敬語形式を考える上で、どのような動詞に使えるかというチェックを行ったわけだが、つぎに、これを文単位でどのような表現に使うことができるかという観点からみたいと思う。

#### 3.1 表現からの整理

敬語に限らず、ある形式が実際に使われるかどうかということを考える際には、語単位だけではなく、文単位での表現においてどうであるかを考えなければならない。特に敬語の場合、使えるはずの形式でも、実際には何らかの敬語使用上の制約から使えないことがある。<sup>12)</sup>例えば、尊敬語を使って配慮を示すような対象の人に対しては、その行動を評価したり、判断することはできない。「先生、〇〇がおできになるんですね」と言えるものは限られるだろう。場合によっては失礼になったり、皮肉にとられたりすることもある。この場合、「できる」の尊敬語形は「おできになる」であると言う知識を持っても仕方がないということになる。これはただ、ある事実を述べたものであるが、相手を動かしたい、相手に対して何か働きかけたいと思うような場合は更に問題が多い。よく問題になるが、日本語学習者が、「先生、コーヒー飲みたいですか」が失礼だと言われて、「お飲みになりたいですか」と言ったという例に表れるように、動詞をただ単に尊敬語形にするだけでは丁寧になるとは言えない。「お飲みになりたいですか」が単純な疑問を表しているとは日本語の場合、考えにくい。従って、「お飲みになりたいですか」は形式的には可能であっても実際にはほとんど使われない、むしろ使わないほうがよい表現ということに

なってしまう。そのような観点から、尊敬語形式がある表現で使われるかどうかを考えてみなければならないということである。そしてその場合、表現意図<sup>13)</sup>が何であるかということからみなければならないということである。<sup>14)</sup>

この場合、「お飲みになりたいですか」という表現は「勧め」ととれるが、そのような場合にはこの表現は使われない。<sup>15)</sup>しかし、「お飲みになりたかったんですね」と言うような事実の描写の場合には可能である。そこで、これらの表現を考える際、いくつかの表現については、事実の描写の場合と相手を動かしたいと考えた場合の二つの場合に分けて考えることにする。表現は、日本語教育初級文型の中から、人の動作を表すものを取り出して考える。分類は、先と同じく、A B C Dで表す。

### 3.2 「お～になる」と文型

まず、「～て～」というアスペクトの形式をとるものには関しては、「～ている」を除き、どちらの動詞を「お～になる」形式にするかという問題があるが、「お書きになってみる」「書いてご覧になる」「お書きになっておく」「書いておおきになる」「お書きになってしまう」「書いておしまいになる」など、本動詞、補助動詞のどちらにも「お～になる」を使うことができる。(ている、てみる、ておく、てしまうなど)<sup>16)</sup>

また、「お～になる」を使って、受け身や使役を尊敬表現で表すことはできない。受け身の場合、上位者の行動（先生が誰かに何かを言われた）も、自分が上位者からの行動を受けた（私は先生に何かを言われた）という両方の場合で上位者に対し「お～になる」を使うことができない。この場合「れる・られる」も使うことができず、受け身表現は一般に尊敬語形式を使えないということができる。使役の場合、「おさせになる」「お見せになる」など使役動詞に「お～になる」をつけることが可能な場合もあるが、「お書かせになる」「お着させになる」など不自然なものが多い。

さきあげた「～たい」の形は相手の意向を聞く場合には使えないが、第3人称者の描写、或いは第2人称者であっても過去の事実を述べるという場合であれば問題は少ない。

「先生はなにかお飲みになりたいそうだよ」「あの時、先生はコーヒーがお飲みになりたかったんですね」などと言えるからである。また、「つもり」「～ようになる」も同じように相手の意向や予定を聞くことは何らかの意図が考えられるために問題となることがある。また、「～てもいい」や、「～しなければならない」は相手の行動を強く指定したり、評価することになるため、そもそも敬語を使うような相手には使えない。他の表現を考えなければならない。

この他の相手を動かしたい時に使われる表現としては次のようなものが考えられる。「したらどうか、した方がいい」(忠告)、「～でもいい」(許可与え)、「～てもらえないか」(依頼)、「～てくれ」(指示)、「しないか」(誘い)。これ以外の形は事実を描写する場合に限って使うことができると考えられる。これらのうち、忠告や許可与え、指示は上位者に対しては使いにくいものであるが、逆に、このような強い表現を使うために、普通では尊敬語を使わない人に対してでも尊敬語をもって待遇するという面があり、逆によく使われる表現であるといえる。これらの表現については、これらの表現意図を表すためにどのような具体的な表現があるか、また、それを上位者に対して使う場合にはどうすればよいかという点を改めて考えたい。

事実の描写の場合、その行動がすでに行われて、確定している方が使いやすい。事実の描写という以上、実際に起こったことを述べるのが自然である。まだ起こっていないことでも「～ことになっている」のように起こることが確実であるようなことには使えるが、「～ようになる」のように確実性の少ないものには使いにくいようだ。過去にすでに起こったことであれば確定していると言えるため、過去の動作については問題ないが、その行動が起こるかどうかわからない、確定していないものには使いにくいようである。「こんなものをお飲みになりたいとおっしゃるかしら」というような例は使うかどうか微妙であるが、「先生はコーヒーをお飲みになりたい(そうだ)」は使いそうである。「お飲みになりたそうだ」は表現主体の判断が入り、動作も確定していないためか、微妙である。

### 3.3 「れる・られる」と文型

「お～になる」と違って「れる・られる」は形の上から、使える文型と使えない文型がはっきりわかれる。「読まれたり、書かれたりする」などの「～たり～たり」の形、「たぶん書かれたんでしょう」などの「～でしょう」の形、「書かれたそうです」などの伝聞の「そうだ」などの助動詞である「れる・られる」の外側につく形式にしか使えない。その意味では非常に生産性が低いと言わざるを得ない。「れる・られる」はたいていの動詞につくという特徴がある反面、いろいろな形式で使いにくいという欠点をもつ。

### 3.4 尊敬語形式と文型

以上を表にすると次のようになる。(表3)



(表3)

	お～になる	れる・られる
～ている, くるなど	A	B
たことがある	A	B
～たり～たりする	A	A
つもり	A	A
たぶん～でしょう	A	A
そうだ (伝聞)	A	A
ることがある	B	B
ようにする	B	B
ようになる	B	C
そうだ (様態)	C	D
ようだ (様態)	C	D
(受け身)	D	D
(使役)	A / B / C	D
(可能)	※	D
やすい, にくい	※	D
たほうがいい	B	D
たい (事実の描写のみ)	A	D
ませんか	A	C
でもいい	B	C
なければなりません	B	D
ましょう	D	D
(命令)	D	D

(表3) の※のついているものは、「お書きになれる」「お書きになりやすい」など「お～になる」の外側にその形がつくことを意味している。「お～やすい」の形は問題とされながらかなり定着が進んでいる。特に「お求めやすい」の形はほとんどの人が誤用と気づかないくらいである。この形をどう評価するかも一つの問題であろう。<sup>17)</sup>

ある文型が尊敬語形式をとり得るかどうかということは、どのような人に尊敬語を使うか、尊敬語を使う人をどうとらえるかというような、敬語を使うための精神といったこと

をよく表しているといえる。つまり、事実の描写の場合は尊敬語を使わなければならないような対象に対しては、表現主体はその行動を評価したり、判断したりすることはできない、また、どんな行動も描写の対象になるとはいえないなどの制限が働く。また、相手を動かしたい場合には、ある表現意図を実現させる場合に使われる表現は決まっていて、どの表現でも自由に使えるとは限らない。敬語を使わなければならないような相手に対しては、相手の意向や感情を問うことも避けられるなどということがある。<sup>18)</sup>

#### 4. 「お～になる」と「れる・られる」

「お～になる」と「れる・られる」の違いは何か。「お～になる」は上位者の状態を表すときによく使われ、つけることのできない動詞がかなりあり、確定した動作を表す文型には使うことができる。また、この形式の外側に助動詞、接尾辞をつけることが可能である。一方、「れる・られる」は動詞の制限は少なく、多くの動詞につけることができるが、動詞または助動詞に直接つく形のみで、それ以外の形では使えない。つまり動詞や文型からの分析を見る限り、この2者は互いに補い合っている面があるといえよう。多くの動詞につくことのできる「れる・られる」も、いくつかの動詞にはつかないし、また、他の付加形式を全くとらないことが、実際の使用の際には使いにくい点となろう。ある表現を尊敬語にしたいとき、「～ていらっしゃる」や、「～て下さる」などの恩恵表現を含めてどの形式が使われるものとして選ばれるか、更に整理しなければならない。また、表現意図から考えた具体的表現の整理も必要である。

敬語は体系として完全なものではない。先にもふれたように、たとえば、受け身や使役を尊敬表現で表そうとしても不可能である。今後の敬語の研究は敬語形からの分析とともに、ある表現を敬語形にするにはどうしたらよいかという、表現の側からの分析も必要になるだろう。

注(1) ここでは「お～になる」は一応「ご～になる」を含めたものとして考えるが、「お～になる」「ご～になる」の違いも検討したい。

(2) 文化庁 1952 「これからの敬語」

(3) 「お～になる」については「〈お～になる〉にならないもの」が窪田氏によって報告されている。それによると、「動詞の連用形が一音節のもの、「似る」、「死ぬ」、複合動詞、音節の多い複合語形式はこの形式をとらない、また、この形から直ちに使役態や受動態にすることはできない」とある。

窪田富男 1992 『敬語教育の基本問題（下）』P.64

(4) 辻村敏樹 1951 「「お…になる」考」『国文学研究』復刊第4輯（『敬語の史的研究』1968 東

京堂 所収)

原口裕 1974「お～になる考統紹」『国語学』96

- (5) 辻村敏樹 1958「いわゆる受け身・尊敬・可能・自発の助動詞」『国文学 解釈と教材の研究』第4巻2号など
- (6) 小泉保・船城道雄・本田 治・仁田義雄・塚本秀樹1989『日本語基本動詞辞典』大修館書店
- (7) 柴田 武 1957「『お』のつく語、つかない語」『言語生活』70号 筑摩書店
- (8) 辻村敏樹編『敬語の用法』(1992・角川書店)に「お似になる」の例がある。
- (9) 窪田 前掲書 p. 95に使役の形についての言及がある。「お読ませになる」という使役動詞につけた形は可能であるが、すべての使役動詞に可能なわけではないであろう。「お食べさせになる」など
- (10) J R 東日本 1992年ジバング倶楽部カレンダー
- (11) 「いらっしゃられる」は二重敬語となるため、好ましくないという指摘が多い。
- (12) 窪田 前掲書 p. 106に、「聞き手の私的領域」に抵触する場合としての考察がある。
- (13) 「表現意図」については 蒲谷宏・坂本恵1991「待遇表現教育の構想」『早稲田大学日本語教育センター紀要3』早稲田大学日本語教育センター
- (14) 熊井浩子 1989「待遇表現指導の一視点―「ほしい、たい」を中心にして」『日本語学校論集』16 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- (15) この場合、「お飲みになりたいですか」が出てこないように、「勤め」という表現意図を持った時にはこのような表現を使う、という形で指導すべきである。
- (16) この場合どちらを敬語形にするべきかについても議論がある。
- (17) 「お～やすい」の形については多くの指摘がある。  
大石初太郎 1982「問題敬語」(1983『現代敬語研究』筑摩書房) など
- (18) このことは、日本語を母語としない人に対する教育の上では注意されなければならないことであろう。いたずらに敬語使用を奨励することなく、表現意図によりどのような表現を使えばよいかと言う観点から具体的な表現を通して敬語を指導して行かなければならない。「お～になる」「れる・られる」といった形だけを教えるのでは使えるようにならないと言うことである。